

大輪の花火 ちぎり絵に



まちかどサポートセンターの20周年で制作されたちぎり絵。港区名港1で

港区 まちかどサポートセンター20周年展
精神障害者を支援する港区のNPO法人「まちかどサポートセンター」は二十八日、築地口商店街(同区名港一)の二会場で、法人の設立二十周年を記念した

「NPOすずめくらび」(同)や「かもめくらび」(同区浜一)の二施設に利用者約九十人が登録し、作業やレクリエーションを行っている。

展示では二十年間の写真や、利用者が十年後の夢を寄せ書きした作品などを飾った。新聞紙のちぎり絵「港の夢HANAABI」は五十人以上が参加し二カ月かけて制作。名古屋港に打ち上げられた大輪の花火を描き、新型コロナウイルス禍の終息を願う作品で、訪れた人が興味深そうに眺めていた。

センターの山田武司理事長は「施設を受け入れてくれた地域に感謝している。これからは地域や商店街の発展に力添えしていきたい」と話した。

(今井智文)

絵とことば 対にして理解促す

中区のギャラリーで作品展



絵画と文章を対にした作品を並べた出展者たち=中区門前町のギャラリーかんしよで

絵画と文章を対にして展示した「絵とことばの作品展」が、中区門前町のギャラリーかんしよで開かれている。十二月五日まで。市内と近郊の二十一六十代の作家九人が日本画、油彩画など四十三点を出品。蟹江町の増岡美紀さんは、ピンクのアリクイを童話調

に描いた作品に「いつもピンクのアリを食べているまいにちまいにちおんなじピンクで からだまでピンクになっちゃったし」などと物語を添えた。長男を描いた作品「愛しの君」を出展した中区のマユ・ワツレンさんは「小さくてかわいくて可能性に満

ちた君 甘えた顔 くすぐったい声 きらきら輝く透き通った瞳の中に彩り豊かな世界が広がる」などと思いをしたためた。「言葉添えることで、より作品を理解してもらえよう」と増岡さん。ワツレンさんは「文章にすると自分の気持ちを読み取られてしまうようで恥ずかしさもあった」と話した。

(小島哲男)

色に関する書籍 県図書館で紹介
1日の講座を前に「甦る過去のイメージ、白黒写真(画像)のカラリ化」と題する講座が十二月一日、中区三の丸一の県図書館五階である。開講に先立ち、色に関する書籍を

紹介するのうらと力をつ後をラる書ぶ来

「三浦山崎の歴史」

百新ま

名古屋観光検定の公式テキスト